

Oita Yufumi


VOL.12

Hospital

発行/2015年4月

大分ゆふみ

病院だより

 大分ゆふみ病院



院長ごあいさつ

「ホスピスの事をよく知っていただくために」

一万田 正彦
いちまた まさひこ



当院は、大分市金谷迫に2001年11月に、全国でも数少ない独立型ホスピスとして、病床数24床で開院しました。十数年の時を経て、このホスピスの存在を地域の方に知っていただけるようになりましたが、お身内に病気の方がいない方にとっては、ホスピスの存在や役割にはあまり関心がない事と思います。当院では、ホスピスの事をよく知っていただくために、4年前より、年に1回市民公開講座を開催しています。今回は、その内容の一部を紹介いたします。

「ホスピスでは何もしてくれないのですか？」といったご質問があります。がんの治療が困難になるという事は、手術、抗がん剤、放射線療法ができない状態ではありますが、何もできなくなるという事ではありません。また積極的ながん治療ができなくなっても、食事が摂れない、身体がだるい、痛い、といった様々な症状が出現します。これらの症状に対して、適切な症状緩和がなされなければ、患者さんは穏やかな日々を過ごすことができません。当院での医療行為を提供する基準は、検査異常値の改善目的ではなく、苦痛症状の軽減につながるものであると考えています。点滴、経管栄養、輸血、腹水穿刺、胸水穿刺などは状況に応じて行われます。また患者さんの体調を考慮し、日々見直しがなされます。ホスピスでの医療行為は、看取りのための医療ではなく、best supportive care（最善な支持療法）であると言えます。

当院入院に関しては、一定の入院基準があります。患者さんご本人が治療困難ながんの状態である事を理解しており、ホスピスへの入院を希望していることが原則です。化学療法などの積極的治療を行っている方は、入院の適応にはなりません。外来での症状コントロールの対応は可能です。認知症や意識障害などで患者さんご本人の入院意思の確認が難しい場合は、ご家族と話し合いをした上で、入院判定会議にて入院予約の可否を検討します。

ホスピスと言うと最期の場所というイメージが強く、勧めにくい事があると思いますが、『がん治療を行わずとも、様々な苦痛を和らげ、より良く生きるための専門病院に移りましょう』と勧めていただく事が良いと思います。当院病院理念は、大分ゆみ病院は「今を生きる」患者と家族を支えます、となっています。私たちスタッフは、患者さんとそのご家族に対して、ホスピスケアを精一杯行っています。闘病で疲れてしまった患者さん、ご家族に当院の事をもっと知っていただき、「ここに来て良かった」と言っていただけるような病院を目指して、これからも日々励んでいきます。

《院内の様子》



ご家族より

とき 「ゆふみ病院での時間を振り返り」

松尾 至子



主人を見送って半年が経とうとしている。仏事も一段落し、お付き合いの方々にはお参りいただいた。何時とはなしに家の中は静まり返り電話さえもその存在を薄くしている。人の気配のない中で自分の呼吸音を聞きながらの生活は実にさみしい。さみしいという言葉の奥行きがこれ程のものだとは思ってもみなかった。一人語りをしてみたり、ときには大泣きしたり、そんな時もう一人の自分が「こうなることは、あの日から解っていたはずよ」と……。考えてみればその通りなのだ。10年前の“あの日”手術さえも見送られる腎臓、前立腺の複合癌だった。主人は死を覚悟してその準備を始めた。毎日思いついた事を書き出し、自分の為すべきことの始末を一つ一つ済ませていった。私としては、そのたびにこれから先は一人でやらなければいけないのだという不安が大きくなってきた。そんな日々から3カ月が経って左腎臓の摘出手術に取り組んでくださった。癌を蓄えた腎臓がみごとに取り除かれた。それを機に前立腺癌とは共生しながら主人の命は多くの医師、医療の方々に支えられながら“生きる”方向へと舵が切り返された。それから9年の後の昨年秋、ゆふみ病院にて静かに穏やかに旅立った。この時間を与えられたことのありがたさは、むしろ今、大きく深く感じている。諸々語り合った。ほんとうの夫婦になれたと思った。遺言だと言って「明るく生きてくれ」とも……。遺影に向って、明るくなんて出来ないっ！と何度言ったことだろう。ただ、たださみしくて心ここにあらずの空の巣状態だった。でもこれを書くにあたって気が付けば“振り返る”ことの出来る自分になっていた。

ゆふみ病院へは7月末、新たに発生した喉頭癌で気管切開がなされ言葉を失った主人を玄関前の大樺が真夏の太陽を遮って優しい日陰を作り迎え入れてくれた。庭先にはつぼみを硬くしていた秋明菊が日を追うごとに開花し目を楽しませてくれた。ラウンジでボランティアさんの入れてくれるコーヒーを楽しみにしていた。ここでは幾組かのご家族とも語り合うことができた。車椅子でお気に入りの帽子をかぶりオニヤンマの飛ぶ庭への散歩では“トンポのメガネは青色メガネ”と歌う私に彼の手は拍子をとっていた。夫婦してドクターに支えられながら、またナースの“ごめんね”と言いながら苦しみに向き合ってくださいる優しさは心に響いた。目をつむると主人が「よかった」と言っているようなそんな顔が浮かんでくる。玄関前の大樺が若葉に覆われ溢れる生命力を見せてくれるころ、ラウンジのコーヒーをいただきながら思い出に浸ろうと思う。



四季折々

当院では、各月ごとにさまざまなイベントを行い、患者さんや家族と共に季節を感じながら楽しい時間を過ごしています。

ボランティアの方々による花壇



Spring

春、中庭には沢山の木々や小さな花々が咲き誇り、家族やスタッフと心和むひとときです。



満開の桜を眺めにお散歩へ



風情あるお花見…素敵な笑顔でパチリ



ハナミズキを背景に素敵な笑顔

Summer



夏、豊かな緑に包まれた小径の散歩や夕暮れの涼やかな風を感じながら過ごす穏やかな時間です。



家族と楽しいひととき



ゆかた姿のスタッフと一緒に



気持ちのいい緑に囲まれて



Autumn



入院当日は年に一度の竹灯りでした

秋、爽やかな空気が流れて、中庭の木々もゆっくり染まり始める美しい季節です。



イベントは楽しいね
ほら！みんな笑顔だね



キラキラとあふれんばかりの笑顔



バイオリンコンサートの様子

Winter



奥さんと息子さんと一緒にクリスマス



節分にカボタン来院！楽しいひとときでした！

冬、クリスマスや餅つき、音楽会など明るい笑顔に心あたたまります。



餅つき！はりきってつくぞ～！

RELAY FOR LIFE

リレー・フォー・ライフ

リレー・フォー・ライフ（RFL）とは、がん患者や家族、その支援者たちが公園やグラウンドを会場に24時間リレー方式で夜通し歩き続けることで、「がん制圧」への願いや「がん」に対する理解、そして絆を深めあうチャリティイベントです。RFLの発祥は、1985年、米国ワシントン州である1人の外科医が、がん患者を励まし、アメリカ対がん運動組織の活動資金を集めることを目的に始めました。「がんは24時間眠らない」、「がん患者は24時間がんと闘っている」をメッセージとして彼は24時間フィールドを走り続け、多くの寄付が集まりました。その後、



参加者がリレー方式で24時間歩きながら寄付を募る形式で定着し、現在は全米5500ヶ所、世界20ヶ国で開催され、それは単なる資金集めに留まらず、地域社会全体でがんを闘う絆を育む活動として大きく広がっています。日本では2006年に茨城県つくば市で始まり、現在は国内40ヶ所以上で開催されています。大分は2008年10月に九州で初めて開催され、昨年は患者とその家族、支援者、県内各病院などの医療関係者、企業、団体など61チーム約5300人が参加して全国有数の規模の大会となりました。会場の大分スポーツ公園大芝生広場ではがん患者をはじめ支援者たちが24時間交代で歩き続け、ステージでは音楽演奏や踊りなど多彩な催しが繰り広げられました。

大分ゆふみ病院は、第1回大会から毎年参加しており、病院職員やボランティアスタッフで24時間タスキをつないでいます。今年も10月10日（土）、11日（日）に開催されます。

会場の様子



スタート

リレーイベントの最初の1周は「サバイバーズラップ」と呼ばれ、がん患者さんやがん経験者の方が歩きます。がん告知や闘病を乗り越え、この日を迎えられることを祝福します。



私たちスタッフ

私たち「大分ゆふみ病院」の職員やボランティアスタッフも毎年参加をしています。「今を生きる」というメッセージフラッグで思いを伝えながら歩きます。



夜通しウォーク

夜通しのリレーウォークは、24時間がんを闘っている患者さんと共にがんを挑むということの象徴です。夜明け、美しい朝日に包み込まれその空気を皆で分かち合います。

■ 研修・施設見学受入れ状況 (2014.4.1~2015.3.31)

研修

- 卒後臨床研修医 17名 (大分大学医学部、大分県立病院)
 看護師研修 9名 (大分県看護協会)
 看護学生研修 35名 (大分大学医学部 看護学科)
 薬学生研修 14名 (福岡大学、九州保健福祉大学、崇城大学、長崎国際大学)

施設見学 68名 (ホスピスセミナー参加者含)

医師3名、看護師40名、薬剤師2名、医療ソーシャルワーカー8名、介護支援専門員5名、学生7名、その他医療関係者など3名

大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院、大分医療センター、別府医療センター、臼杵市医師会立コスモス病院、中津市民病院、岐北厚生病院、大分大学教育福祉学部 ほか

※入院患者さん、ご家族ともに、ご迷惑をお掛けしないよう細心の注意を払っていますのでご協力をお願いいたします。

■ ホスピス診療記録 (2014.4.1~2015.3.31)

■ 入院患者数

170名 (男84名、女86名)

■ 平均年齢

74歳

■ 住所分布

大分市124名、大分市外46名

(大分市外: 由布市12名、別府市8名、竹田市7名、豊後大野市3名、県外2名など)

■ 紹介元病院

大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、大分医療センター、やまおか在宅クリニック、大分三愛メディカルセンター、別府医療センター、井野辺病院、うえお乳腺外科、吉川医院、大久保病院、アルメイダ病院、大分中村病院、新別府病院、中津市民病院、豊後大野市民病院、湯布院病院、済生会日田病院、九州がんセンター、産業医科大学附属病院 ほか

入院までの流れ

①入院相談

電話で入院の相談を行った後、まず患者さんの容態など現状を伺います。また、入院や見学を希望の方は、来院日時のお約束をします。

②医師による診察面談

入院希望の方は、患者さんご本人またはご家族に対し、医師による診察と面談が行われます。また施設の見学もできます。
※紹介状とX線フィルムなどを持参していただけます。

③入院判定会議

医師、看護師長、医療ソーシャルワーカー(相談員)によって行われます。

④会議の入院決定の連絡

患者さんまたはご家族に入院の適否、日程について連絡をします。

⑤入院

相談員、または医師が患者さん、ご家族、紹介元病院と連絡を取り、入院の調整を行ないます。

病院理念

大分ゆふみ病院は
『今を生きる』患者と家族を支えます。

- 1.患者と家族の権利と尊厳を守る診療・看護を実践します。
- 2.心身の不快な症状の緩和につとめ、最善のケアの提供を目指します。
- 3.家族の不安や悲しみが和らぐように支えます。
- 4.さまざまな職種とボランティアがチームを組み、ケアにあたります。
- 5.大分県の緩和ケアの発展に寄与します。

ご案内

入院をお考えであったり見学をご希望される方は、
必ず電話予約をお願いいたします。

※予約をされていないと相談が重なり、対応できない場合やお待ちいただく場合がございます。

■入院の対象となる方

- 医師が治癒が期待できないと判断した悪性腫瘍の患者を対象。
- 患者と家族、またはその何れかが入院を希望していることが原則です。
- 入院時に、「病名・病状」について理解していることが望ましく、理解していない場合には、患者・家族の求めに応じて適切な説明が行われます。
- 社会的、経済的、宗教的な理由によりお断りすることはありません。

■がん疼痛緩和外来 [要予約]

がんによる痛みやしびれなどでお困りの方、また、痛みにより眠れない方など、どなたでも直接外来受診や電話相談に応じます。専門の緩和治療医が対応いたします。お気軽にご連絡ください。 ※要予約

■在宅を希望する方

ご自宅で生活を希望する方は、訪問診療で症状コントロールすることも可能です。必要に応じて、訪問看護、ヘルパーと連携いたします。

■講演依頼を承ります

緩和ケア・ホスピスについてわかりやすい内容で、講演活動を行っています。お気軽にご相談ください。

■ホスピスセミナーを開催しています

ホスピスケアをより多くの方に知っていただくために、ホスピスセミナーを春・秋の年2回、開催しています。詳細につきましては、ホームページをご覧ください。(http://oitayufumi.com)



まず、相談窓口へお電話ください。

☎ 097-548-7272

電話受付時間 / 月～金曜日 AM9:30～PM4:30 (祝日は除く)

交通のご案内

- バスをご利用の場合
大分駅より大分交通<机張原>行き、
上金谷迫停留所下車。
- 車をご利用の場合
大分駅より車で15分、大分インターより車で5分